

## The 48th annual meeting of the Society for Neuroscience 参加記

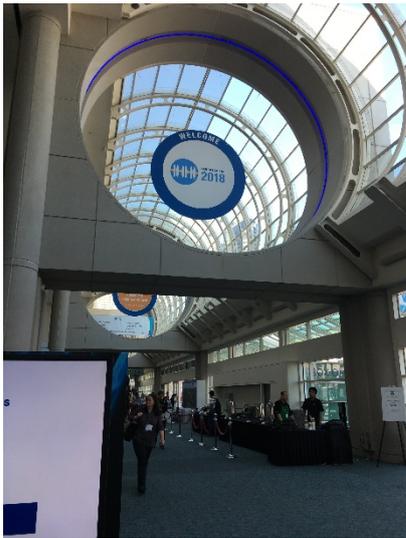
遺伝学専攻 形質遺伝研究部門 (2018年9月修了) 中沢 信吾

この度、遺伝学専攻より海外渡航旅費支援を頂き、2018年11月3日～7日にアメリカ・サンディエゴにて開催された The 48th annual meeting of the Society for Neuroscience (SfN) へと参加いたしました。SfN は神経科学分野の世界最大の学会であり、世界各国から大勢の研究者が毎年の大会に参加しています。今年の大会参加者は総勢 3 万人を超え、ポスター発表だけでも 12,625 演題、会場も 1 フロア 5 万平方メートル弱 (東京ドームとほぼ同じ) の 2 階建てと、桁違いの規模の大会でした。

私は本大会にて、今年の 8 月に第一著者論文として発表したばかりのプロジェクトについてのポスター発表を行いました。発表は盛況で、多くの方に私のポスターで立ち止まっていたいただきました。論文を読んだという方も来てくだされば、近い分野の方でご存じでなかった方もおられ、このような機会に積極的に参加し発表する重要性を改めて認識させられました。

もちろん自身の発表だけでなく、他の方の発表や企業ブースを回り最新の知見やこれからのトレンドを掴むことも学会参加の大きな目的でした。今年は以前にも増して神経疾患に関する講演が多かったように感じました。一方で臨床に関わること以外にも様々な講演があり、基礎研究はもちろん、初日には“Music and Brain”という議題で現代ジャズシーンの最重要人物の一人である Pat Metheny 氏が登壇し神経科学者 Richard Huganir 博士、Charles Limb 博士と「音楽と脳の関係」について議論するというセッションもあり、私の専門分野とは全く異なる神経科学の世界を覗くことができ非常に面白かったです。また、コンピュータサイエンスの分野の方 (または彼らの技術) がいわゆるドライな分野だけでなく、ウェットな分野でも存在感を増してきたと強く感じました。近年広く使われるようになってきた RNA シーケンスや超解像顕微鏡等で得られる膨大なデータの解析に、コンピュータサイエンスの技術や考え方が持ち込まれることで新たなシナジーが生み出されているように感じ、この傾向は今後より顕著になっていくだろうと考えています。

今回、本専攻よりサポートを頂き海外の学会に参加できたことで、様々な知見を得ることができました。また、自身の成果を共有し、多くの議論を行うことができました。現在の所属で進めているプロジェクトのみでなく、その先で何を行っていくかを考えるためにも有意義な経験ができたように思います。旅費支援を頂きましたことを誠に感謝いたします。



会場となったサンディエゴ・コンベンションセンターの内装は大会に向けて模様替えされており、一步踏み入れるだけで弥が上にもアドレナリンが放出された。会場内だけでなく、街中のレストランや街灯にも大会の旗やパネルが掲げられており、街を挙げての一大イベントの様相を呈していた。

最も大きな会議室 Ballroom 20 では洒落たセット（右写真）を背に、世界的に有名な研究者らによる講演が行われた。約 3,500 平方メートルの部屋の天井の各所からはスクリーンが吊り下げられ、演者または発表スライドが映し出される様はさながらアイドルのライブ会場であった（我々研究者にとっては正にそのものかもしれない）。一部のスクリーンにはスピーチがリアルタイムで字幕に起こされており、理解の大きな助けとなった。

